



筑紫女学園大学リポジト

Categorical Requirements of Proper Nouns

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/92

固有名詞のカテゴリー要件

緒方隆文

Categorical Requirements of Proper Nouns

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は命名研究の一環として、固有名ひいては固有名詞を考察する*1。むしろ命名は固有名詞に限らない。日々様々なものに命名される。しかし固有名詞は、その中で独自の位置を占める。唯一物と思われるものに命名されるからである。そのためカテゴリーとは一見無縁であるかのように見える。しかし本稿では固有名ないしは固有名詞において、中心的な働きをするのがカテゴリーであると主張していく。

ここでの結論は、固有名には3つの必須要件があるとする。一つはカテゴリー特定である。これは属する種類を特定することを意味する。二つめに成員特定がある。特定したカテゴリーのうちどの成員であるかという特定である。三つめはカテゴリーラベルへの力点推移（必須化）である。普通名詞と異なり、固有名ないしは固有名詞はラベルが重要な位置を占める。ラベルへ力点推移（ラベルを必須化）することが固有名詞の要件といえる。この3つは必須要件であるとともに、固有名の特徴であることを述べていく。

固有名を考えると、命名の問題は切り離すことができない。というのも固有名の中に、命名の過程が残されていることが多いからである。命名は恣意的ではなく、有契的と考える。有契的と言うには、何によって動機づけられているかを明示する必要がある。本稿はそれはカテゴリーであると考えている。カテゴリーは命名プロセスの根幹をなすとともに、命名された固有名もまたカテゴリーに根ざしていると考えている。本稿は命名プロセスそれ自体ではなく、命名の結果として生じた固有名が何であるかを考察する。このときカテゴリーが中心的な働きをしていることを見る。

以下の構成は次の通りである。まず2節で、2つの特定(カテゴリー特定と成員特定)を見る。そこではこの2つが固有名にとって必須要件であることを示す。次に3節でもう一つの必須要

件、力点の推移（カテゴリーラベルの必須化）を見る。このとき普通名詞と固有名詞は連続していることを示す。そして4節でカテゴリーを6つのタイプに分類し、タイプ毎の固有名詞を示していく。最後に5節では固有名詞の唯一性との関連で、繰り返しの固有名詞を見ていく。

2. 固有名における2つの特定

2.1 カテゴリー特定と成員特定

固有名は、一つの個体（指示物）を特定するための名前である。逆をいえば、固有名によって指示物が特定できなければならない。そのため固有名には、指示物を特定するための手がかりが含まれることになる。この手がかりとして森岡（1977：205）は、名前の2つの働きとして、表示力と表現力をあげている*2。百合の名前の（1）をもとにこの2つを説明する。

（1）姫百合、鬼百合、山百合、黒百合、車百合（森岡 1977：209）

表示力（示差性）とは、他と区別する働きをする。（1）で言えば「百合」の部分にあたり、類概念を示す。それがどんな種類であるかを表している。一方表現力（表意性）は、人々に理解される働きになる。（1）で言えば、姫、鬼、山、黒、車の部分にあたり、種差を示す。それがどのような特性を持つかなど個体について述べる。「姫百合」を例にとると、類概念を示す「百合」と種差を示す「姫」との組み合わせになっている。「百合」によって、名が指す範疇がはっきりし、強い表示力がある。また「姫」（可憐で小さい）によって、指示するものの特徴を表現しており、表現力も強い。（1）は表示力と表現力のバランスがとれた例になる。

とはいえ森岡が指摘するように、この二つの働きは名付け方によって違いが生じる。（2）は表現性を捨てており、種差にも地名・姓・屋号を冠し、もっぱら表示力に力点をおいた名になる。（3）は所属する類・範疇を示すことなく、特徴のみを表現しようとしている。表示力はなく、表現力のみがある（（2）（3）の例も含め、森岡 1977：209）。

（2）三鷹市、青梅街道、三井銀行、小平市立第三中学校、松屋旅館、武蔵小金井駅、西海酒店

（3）花春（酒）、白銀（かまぼこ）、ほととぎす（ユリ科植物）、関取（大麦）、神力（水稻）

本稿でも固有名には森岡が言う2つの要因（表示力と表現力）が関わると考える。しかしながらカテゴリーの観点から固有名を考察し直す。というのも名前、ひいては名詞は、カテゴリーが強く関わっており、カテゴリーを通して考察する必要があると考えるからである。そのため森岡（1977）の表示力・表現力とは必ずしも一致しない。

そもそも固有名は、一つの個体（指示物）を特定するための名前であった。特定する一つの方法として、その種類をのべる方法がある。これは森岡の表示力に相当する。森岡が類概念を示すと述べているように、これは個体が属するカテゴリーをさす。ただカテゴリーといっても、広すぎては意味がない。特定可能な最小カテゴリーが選択される。最小カテゴリーとは、指示対象（固有名の対象）が属する主観的に一番小さいカテゴリーをさす。ただし最小カテゴリーに加えて、上位カテゴリーが加わることもある。

もう一つの特定の仕方は、最小カテゴリーの中における特定化になる。最小カテゴリーを、い

わば参照点として、その中の一つの成員を特定する。特定にあたっては、他成員との差異を示すことで、特定する。これは森岡の表現力に相当する。種類（カテゴリー）とは関係がないため、命名の自由度はかなり高まる。

ここでこの二つを便宜上、<カテゴリー特定>と<成員特定>と呼ぶことにする。カテゴリー特定とは、最小カテゴリーを限定することである。このことは他の同列カテゴリーを背景化することを意味する。背景化することで、他の同列カテゴリーではなく、この最小カテゴリーに属すると言える。つまりカテゴリー特定とは、最小カテゴリー以外のカテゴリーを背景化するプロセスといえる。

一方成員特定とは、カテゴリー内の一成員を特定することをさす。最小カテゴリー内の他成員を背景化することで、他成員ではなく、この成員であると特定する。そのため固有名は、2つの背景化（カテゴリー外背景化とカテゴリー内背景化）によって、個体を特定し、命名されたものと言うことができる。ここで注意しなければならないことがある。森岡の表示力・表現力とは異なり、固有名の中にどちらかの強弱関係があるわけではない。カテゴリー特定と成員特定は、固有名にとって必須要件だと考える。2つの特定があって初めて、固有名としての素地ができる。

2.2 表示力と表現力のゆれ

2つの特定を必須と考えるとき、(1)－(3) でみたような表示力と表現力の強弱関係が問題に見える。(3) のような表現力のみに見える表現があるのは事実である。この場合、一見最小カテゴリーが存在していないかのように見える。しかしながら存在していないのではなく、文脈などにより最小カテゴリーが暗黙の前提になっているとき、最小カテゴリーは固有名の中に含まれないことが多々ある。

このことを蓑川（2006）の商品名を通して考えていく。蓑川では商品名が変遷することを述べている。蓑川によると「商品名構成要素の出現には一定のパターン」があり、「いずれの商品もまず<基本名>が現れ、それと同時に少し遅れて<機能名>が現れ、最後に<固有名>が現れる」と述べている（(4) は蓑川 2006：52-53）。

- (4) a. <基本名>：冷蔵庫（類概念）、三菱冷蔵庫、ゼネラル冷蔵庫（後ろ2例は玉村（1988））
- b. <タイプ名>：東芝電気冷蔵庫ご家庭用実用型、富士冷蔵庫最高級
- c. <機能名>：サンヨーソリッドステート冷蔵庫、冷凍冷蔵庫3ドアロータリー
- d. <固有名>：NEC電気冷蔵庫ファミリア、冷蔵庫あこがれ（玉村（1988））

<基本名><タイプ名><機能名>が本稿で言う最小カテゴリーの特定部分で、蓑川が言う<固有名>が成員の特定部分になる。蓑川が指摘しているようにこの変遷は、「新商品・新機能の出現とその普及（一般化）」に関係している。新機能の出立では、<機能名>が増える。これは新商品・新機能がどのカテゴリーに属するか分からない、あるいは既存のカテゴリーにないために、最小カテゴリーを明記する必要があるからである。一般化が進むと<機能名>が減り、<固有名>が増える。この時点では機能が十分に知られており、あえて商品名の中に最小カテゴリーを組み込む

必要がなくなっている。入れなくとも分かるので、成員の特定部分である<固有名>のみが付けられることになる。

なお蓑川は《吸収》の問題も扱う。「<機能名>によって表されていた新機能が当たり前になると、すでにあった<機能名>は消え、その意味内容は類概念に《吸収》されて、類概念の内包する意味が変化する」と述べている。例えば「電気冷蔵庫」は、戦後、氷冷蔵庫、ガス冷蔵庫、電気冷蔵庫と3種類の冷蔵庫があったため、他と区別するために、電気が当初付けられていた。しかし電気冷蔵庫の普及が60%を超えると、「電気」が名前につかなくなる。冷凍冷蔵庫も同じで、冷凍が当たり前になると「冷凍」が消え、「冷蔵庫」となる。洗濯機も「自動反転」という機能名が付いていたが、普及するに付け「洗濯機」だけになる。同様に「カラーテレビ」は「テレビ」となった(例も含め、蓑川 2006:57-58)。これも最小カテゴリーで説明することができる。つまり最小カテゴリーが変化したため、吸収がおこる。ある機能がそのカテゴリーに特有でなくなり、上位カテゴリーで当たり前になっている。そのため<機能名>はもはや最小カテゴリーではない。上位カテゴリーが、最小カテゴリーへと変化している。そのため、機能名が明示されなくなり《吸収》がおこる。

また新機種がでたためにおこる「再命名」の現象がある(cf. 鈴木 1996)。新商品が出たときに、従来の古いものを区別するために、古い機能名を新たに名前に追加して命名し直すことを言う。蓑川は、「二槽式」洗濯機、「白黒」テレビの例をあげている。新機能が普及したために、これら「二槽式」「白黒」は、上位カテゴリー(洗濯機・テレビ)のデフォルトの特性ではなくなる。そのため上位カテゴリーが最小カテゴリーではなくなり、より限定した最小カテゴリーが名前に追加される。よって吸収と再命名は逆の関係にある。吸収は上位カテゴリーへ、再命名は下位カテゴリーへと、最小カテゴリーの仕切り直しがおこり、命名が行われていることが分かる。

2.3 その他の固有名(地名と人名)

最小カテゴリーより上位のカテゴリーが、名前に付加されることがある。例えば地名の場合、聞き手が特定できるまで上位カテゴリーが付加され続ける。そもそも最小カテゴリーは、成員特定するための参照点の働きをする。そのため参照点の働きをしない最小カテゴリーであれば、参照点の働きをするカテゴリーまで付加され続けられる。むしろその地名だけで、どの地域に属するかが分かればその地名だけが使われる。しかし通例はそれが所属する地名(カテゴリー)が付加される。

東京都文京区音羽という地名を例にとる。音羽で分かれば、音羽ですむ。しかしそれで特定できない場合、最小カテゴリー文京区が付加される。この文京区が参照点とならなければ、東京都が付加される。しかし東京都音羽とはならない。最小カテゴリーをとばすことはない。重層的に最小カテゴリーから積み重ねられるからである。そのため最小カテゴリーを含め、参照点カテゴリーまですべてのカテゴリーが明記されることとなる。なお「日本」は通例付加されない。東京都が参照点として十分機能するからである。ただし外国が絡む場合は、日本が参照点となるた

め、明記される。

また人名の場合も、状況がやや特殊といえる。とりわけ日本名のように姓と名が有る場合、姓がカテゴリー特定を表し、名が成員特定と考えることもできる*³。つまり姓によってどの一族(グループ)に属するかを示し、名でそのグループのだれかを特定しているとも考えることもできるからである。しかし姓は最小カテゴリーではない。その証拠に、姓だけでも成員特定の働きをすることができる。ここでの最小カテゴリーは人(ないしは日本名であることから日本人)と考えられる。しかし十分認識されているので、これは明記されない(cf. クロマニオン人(Cro-Magnon man))。姓はあくまで成員特定の中にある、より小さいカテゴリーといえる。成員特定の一部であることから、本来の成員特定の働きも担うこととなる。そのため成員特定であっても、その中に最小カテゴリーより小さいカテゴリーを含むことができることが分かる。しかしそのカテゴリーは成員特定の役目がより大きいため、最小カテゴリーとはならないのである。

むろん世界的に見ると名前の付け方は、いろいろ異なる(cf. 出口 1995, Interpol 2006)。姓がなく、名前だけのところもある。名前が複数つけられることもある。しかし明記されようがされまいが、カテゴリー特定と成員特定が人名には働いている。しかし日本名のように、姓と名がある場合、時として複合的な働き(カテゴリー特定と成員特定)をするものが出てくることもある。

3. 必須要素の推移(普通名詞と固有名詞の関係)

2節で固有名には、2つの特定(カテゴリー特定と成員特定)が必要であると述べた。しかし特定するだけで、固有名詞になるわけではない。普通名詞であっても、限定詞the, this, these, that, thoseなどを付加することにより、同一カテゴリーの中から特定することができる*⁴。しかしこうした限定詞を付加しただけで固有名になることはない*⁵。

ここで根本的な問が生じる。普通名詞と固有名詞の違いは何かという問である。両者は一見、全く異なるものに見える。例えば「りんご」と「ドイツ」では、「りんご」は同じ種類のものがたくさん存在し、「ドイツ」では一つしかないため、明らかに異っている。しかし実際は、普通名詞と固有名詞の境は漠然としている。固有名詞が普通名詞化したり、普通名詞が固有名詞化することはよく見られる現象である。

- (5) a. The Mary that you met yesterday is my fiancée. b. We need another Roosevelt.
c. This is not the Paris I used to know. d. Let's listen to some Beethoven tonight.
e. Can I borrow your Guardian for a few minutes? (Huddleston and Pullum 2002 : 521-2)

(6) TIME, Apple, Nature, Broadway, the Beatles, the North Sea, the English Channel, etc.

(5)は固有名詞が普通名詞化した例になる。(a)名前保持者、(b)名前の特質保持者、(c)具現化の一つ、(d)作品、(e)新聞等など様々な意味を持つ。一方(6)は普通名詞が固有名詞化した例で、雑誌、社名、新聞、雑誌、地名、グループ名など様々な固有名詞で普通に見られる。

つまり普通名詞と固有名詞は連続している。連続はしているが、違いがある。その違いをカテ

ものを認識するわけではない。Aは認識においてラベルは随意的であることを明確につげている。

次にBである。一般的な普通名詞がこれに相当する。ラベルと成員部分の両方がある。Cとの違いは、ラベルと成員部分の比重の違いにある。普通名詞はその成員部分が必須で、そこに力点がある（図では太線で表記）。重要なのはラベルではなく、成員部分である。運用上、ラベルが用いられるにすぎない*9。

さらにCを見る。Cは固有名詞である。Bと同じ構造をしているが、Bとは異なりラベル部分が太線で表記されている。すなわち固有名詞なので、ラベルに力点がある。ラベル部分が必須で、成員部分は随意的でかなり弱いものになる。BとCは構造が同じであるため、単に力点（必須部分）が入れ替わることで、両者は容易に入れ替わる。普通名詞と固有名詞が連続した関係になるのは、この構造が理由と考えられる。しかし連続してはいるが、両者には力点（必須部分）という重要な部分で違いがある。

最後にDであるが、これも固有名詞である。ただDには成員部分がない（成員部分が見えない）。ラベルのみしかないために、属性ではなく、ラベルと指示物が直接結びつく。しかし実際にはラベルのみの固有名詞は、使用されるにつけ、Cタイプに移行することが多いと考えられる。

固有名詞はCとDの2タイプあるので、翻訳する場合もまた2通りの訳し方がある。Dの場合、ラベルしかないのでラベルを翻訳することになる。ラベルには音と文字しかない。原語の文字をそのまま使うこともできるが、通例は翻訳する言語音におきかえて表記する。地名や人名などが典型的にここに入る。一方Cタイプの固有名詞の場合、属性部分を翻訳・援用することができる。例えば、Great Lakesは属性部分をとって「五大湖」と訳したり、Harvard Universityを「ハーバード大学」とするなど、一部分を訳する場合がある。ただしあまり属性に頼ると互いのつながりが分かりにくくなるため、こうした訳は定訳に限られるのが普通である。とはいえこうした固有名詞の訳の違いは、固有名詞のタイプ（CかD）に起因していると考えることができる。

普通名詞と固有名詞の違いは、突き詰めて言えば、力点（必須部分）の違いということになる。そのため2節からの流れでまとめると、固有名には2つの特定化（カテゴリー特定と成員特定）に加え、ラベルの力点化が必要と考えられる。この3つが固有名にとっての必須要件であるとともに、この3つが固有名の特性であると言うことができる。

4. カテゴリータイプ

4.1 命名の2つのレベル

固有名詞を考察するとき、命名の問題は避けて通ることはできない。その成り立ちが、固有名詞に残るからである。2節で見たように、固有名は2つの特定が要件であった。カテゴリー特定と成員特定である。そのため、命名においてもこの2つが関わっている。まずカテゴリー特定のレベルであるが、これには命名に関して2つの観点が必要である。一つは最小カテゴリーが何かという、カテゴリーの内容の問題がある。もう一つはそのカテゴリーが、どのようなカテゴリータイプであるかという構造の問題である。この構造の問題は重要である。例えば、英語の固有名

詞においては、単数か複数か、冠詞theの有無など形態の違いとして現れるからである。そのためカテゴリータイプを踏まえて、固有名を考察する必要が生じる。これについては4.2節、4.3節で考察する。

次に成員特定のレベルがある。成員特定は最小カテゴリー内での特定であるため、命名の自由度がかなり高い。しかし成員特定レベルの命名は、恣意的な選択ではなく、有契的な選択と考える。確かに、言語や地域によって同じものが異なる名称を持ったり、同一物であっても複数の名称を持つことがある。この名前でなければならないという必然性など存在しない。しかし命名とは、ある状況下で主観的にprominentな要素をもとに行われる。命名は動機づけられている。時には、指示物が持つ特性であったり、指示物の特性とは関係なく音の響きなどから、つけられることもある。たとえ指示物との関係が薄くとも、命名は何らかの動機づけをもっており、その動機づけのなかで一つが選択されると考えられる。

それでは成員特定レベルの動機付けとは何であろうか。ここでもカテゴリーと考える。カテゴリーが動機付けとなり、命名され、固有名が生じる。ただしカテゴリーの関与の仕方が異なり、比喩のプロセスが関わると考える。比喩のプロセスとは、一つまたは複数のカテゴリーにおいて、同一化と焦点推移がおこるものをさす (cf. 緒方 2011b)*¹⁰。本稿では命名そのものを扱うのではなく、固有名詞とカテゴリーの関係を見ていくことを目的とする。そのため成員特定レベルの命名は別稿に譲ることとして、カテゴリー特定レベルのみを考察する。というのも英語の固有名詞で考察するとき、カテゴリー特定レベルでは、固有名の形態が関わってくるからである。

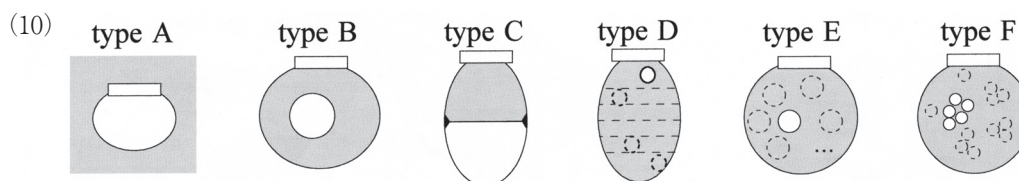
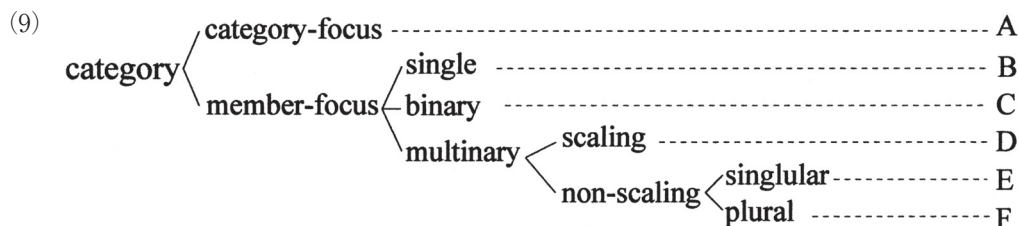
4.2 カテゴリーのタイプ分け

カテゴリー特定レベルにおいて、最小カテゴリーがどんなタイプのカテゴリーかは重要である。単数・複数、定冠詞theの有無などに関わるからである。3節で見たように、普通名詞と固有名詞の違いは力点（必須部分）の違いであった。そのため両者は基本、共通のカテゴリー構造（カテゴリータイプ）を共有すると考えられる。このカテゴリータイプには、緒方（2011a）のカテゴリー分析を修正したものをを用いていく。

緒方（2011a）ではカテゴリータイプを7種類に分類した。普通名詞タイプが6種類と、固有名詞が1種類であった。しかし本稿では、普通名詞と固有名詞は、必須要素の推移であると考え（cf. 3節）。すなわち普通名詞では成員部分が必須で、固有名詞ではラベル部分が必須となっている。構造が基本同じであることから、力点を推移することで両者は互いに入れかわることができる。

このことをふまえると固有名詞は、すべての普通名詞のタイプと同じということになる。そのため固有名詞を分ける必要がなくなる。そこでカテゴリータイプは緒方（2011a）の普通名詞部分のみの6タイプとする。そしてカテゴリータイプにおいて、普通名詞・固有名詞の区別をやめ、両者の区別は力点の違いに帰することとする。このときカテゴリーの6タイプは、(9)のようになる。各々のタイプを図示したものが(10)になる*¹¹。(10)では白い部分に焦点があつた

ており、網掛け部分は背景化された部分になる。また長方形部分がカテゴリーラベルを、楕円がカテゴリーの成員部分を示す。カテゴリーの成員部分の中の○は個体成員を表している。



各々のタイプを簡単に説明する。まずカテゴリーは、カテゴリー焦点 (A) と成員焦点 (B-F) に分けられる。カテゴリー焦点とは、カテゴリーの外側を背景化することで、カテゴリー全体を前景化する。カテゴリー全体に焦点があたるので、中の成員は主観的に見えることはない。典型的には物質名詞や抽象名詞など、中に個体成員を見いだせないものになる。とはいえ実際は、それらの名詞に限定されない。カテゴリーの外を背景化するので外部背景化と呼ぶ。一方成員焦点とは、カテゴリー内部で背景化がおこる。カテゴリー内部を背景化するので内部背景化と呼ぶ。カテゴリー焦点とは異なり、カテゴリー内の成員は一つ一つ個別化しており、各成員は見えている。カテゴリー内にある別成員を背景化することで、一部の成員を前景化する。

さらに成員焦点は、カテゴリー内の成員の数によって分けられる。1つ (B)、2つ (C)、3つ以上 (D-F) になる。この数は、主観的に見た成員の個数になる。3つ以上はさらに、尺度あり (D)、尺度なし (E, F) で分けられ、尺度ありとは、何らかの基準ですべての成員が順序づけられているものをさす。一方尺度がない場合は、そうした基準がない。このとき前景化される成員が一つ (E) か複数 (F) かによってさらに分類される (詳細は緒方 2011a)。この数・尺度はあくまで主観的なものである。以上カテゴリータイプは、6タイプある。普通名詞は上記6タイプに分類され、力点を変える (ラベルを必須部分にする) ことで、すべて固有名詞になる。

4.3 タイプごとの固有名詞

本節ではカテゴリータイプ毎の固有名詞を見ていくこととする。形態等の違いが分かりやすい英語の固有名詞をもとに考察する。まずタイプAの場合、成員が見えず、成員内部の境界がはっきりしない。そのため固有名詞に必要な、個別性がない状態にある。しかしそれが特殊で唯一物であれば、個別性があるとみなされ固有名詞化する。例えば (11) では神の摂理や唯一物の真理が固有名詞化している。これらは唯一性が高いものになっている。

(11) Province (摂理、神意)、Truth (真理)、the Atonement (キリストの贖罪)、etc.

一方(12)ではタイプAから、タイプEへと推移が起こっている。つまりタイプAの属性をもつ集合体(タイプE)の中から際だった成員が選ばれ、固有名が命名されている*12。

(12) the Almighty ; Providence; the Divinity (神)、Nature (自然の女神)、Love (愛の神)、Wisdom (賢者)、Fortune (運命の女神)、etc.

一方(13)では境界線が不明瞭なもの(ocean, sea, river, canal, isthmus, peninsula, gulfなど : Hewson 1972 : 109)にtheが付加され固有名詞になっている。境界が不明瞭なままであれば、ゲシュタルト性、つまり個別性がない。そこでtheを付け「あの～」という意味で境界を明確にしている。つまりこのtheは、境界を定め、切り取るための用法になる。theを付加することで個別化されるため、固有名詞化が可能となる。しかしこのtheは、固有名詞自体が認知ないしは多用されるようになると、theがなくとも「あの」と認識されるため、theを付加しなくなることもある。

(13) the Atlantic, the Indian Ocean, the Mississippi River, the Panama Canal, etc.

次にタイプBの場合、最小カテゴリーの中に、もともとその種のものが一つしかないときの固有名詞に相当する。(14)のような例がある。これらはすべて個別化されたものであり、ゲシュタルトとして個体と認識される。theが付くものであっても、話し手にとって唯一性が高くなるとtheは不要になる(Popeはゼロ冠詞でも可)。ちなみにGodはキリスト教においては唯一の神である。そのためキリスト教という最小カテゴリーにおいては、タイプBになる。

(14) the Pope, the Equator, God, etc.

タイプCは、最小カテゴリーに成員が2つのみある場合になる。この場合、ほとんどが対称的に用いられる。数は少ないが(15)のような例がある。

(15) a. the West (⇔the East), the North (⇔the South) b. Upper House (⇔Lower House)
c. the Eastern Hemisphere(⇔the Western ~), the Northern Hemisphere(⇔the Southern ~)

タイプDは、尺度を持つカテゴリーになる。何らかの尺度によって、すべての成員が並べられている。この例として、国王や女王の名前、本などが例としてあげられる。

(16) Henry VII(国王)、Elizabeth II(女王)、Benedictus XV(ローマ教皇)、Rocky IV(映画)、Battle Earth III(書名) など

タイプEは、尺度がない、複数の個体成員が集まったカテゴリーになる。これはタイプBと異なり、最小カテゴリーの中に、同じ種類のものが複数存在する。そのため定冠詞theを付加することで、他と異なることを示し、固有名詞化している。この場合典型的な成員が選ばれる傾向にある。この例として(17)がある。the Streetの例から分かるように、最小カテゴリーがアメリカかイギリスで異なれば当然指し示すものも異なってくる。

(17) the Tower(ロンドン塔)、the City(ロンドンの旧市部)、the Palace(バッキンガム宮殿)、the Street (=Wall Street (米)、Lombard Street (英))、the Castle (=Dublin Castle)

なおBerry (1993) が述べるように、特定の建物を再度言及するとき、the + 語頭大文字名詞

で書くことがある（例は（18））。これは時間・場面で直近のものが最小カテゴリーになり、その中で唯一物の対象が固有名詞化したものと考えられる。

(18) And so round to the north side of the Cathedral. (Berry 1993 : 59)

最後にタイプFは、タイプEと似ているが、複数成員が選ばれ、固有名詞化される。ここで注意しなければならないのは、たとえ複数成員であっても、それらはゲシュタルト化しており、個体と見なされることである。そのため個別化しているとみなされ、固有名詞になることができる。それでもタイプEと異なり、複数成員に焦点があたっていることから、複数形が固有名の中にも組み込まれることとなる。この例として（19）などがある（Huddleston and Pullum 2002 : 517）。このとき複数成員がどこまで入るのか境界線が不明瞭であるため、切り取りのtheが付加されることとなる。

(19) the Alps, the Himalayas, the Urals (山脈), the Bahamas, the Hebrides, the Maldives (諸島), the Netherlands, the Balkans, the Dardanelles (他の地名), the Beatles (グループ名)

以上見てきたように、すべてのカテゴリータイプに対して、普通名詞と固有名詞が存在する。これはとりもなおさず、両者はカテゴリーの構造（カテゴリータイプ）を共有していることを示している。普通名詞と固有名詞の違いは、繰り返しになるが、力点（必須部分）の違いに過ぎないと言える。

4.4 個別性

すでに4.3節で見たように、固有名は境界線がはっきりした個体でなければならない。これを個別性と呼べば、固有名には個別性が必要である。しかし個別性とは何であろうか。ここではカテゴリーにおける個別性を考察する。

カテゴリーで個別性があるとは、ゲシュタルト性が強いことと考える。カテゴリーにおいてゲシュタルトは、様々なレベルでおこる。まず成員レベルがゲシュタルトになっているものに、(10)のタイプD, E, Fがある。D, Eでは一成員がゲシュタルトとなり、固有名詞となる。Fはグループがゲシュタルトとなり、あたかも一つの個体のように見なされ、固有名詞となる。

次にカテゴリー全体がゲシュタルトになるものがある。その1つにカテゴリー全体が強固に結びつく「個体カテゴリー」と呼ぶものがある。本来は分割できない一つの個体であるが、そこに成員を見いだすものをさす。個体の中に、特性や状況がいくつか含まれるとみなされると、それらの集合体としてカテゴリーとみなされる。具体的には人、国、物など様々なものがある。これらは条件を整えば、固有名詞になる。この場合個体カテゴリーのラベルだけではなく、その中の一成員が固有名詞になることもある。例えば、宵の明星（Hesperus）と明けの明星（Phosphorus）を考えてみよう。これはどちらも金星である。金星は個体であるが、いろいろな状況にある金星の集合体と考えることができる。その中で特定の状況にある金星に固有名を与えている^{*13}。個体カテゴリーは、ラベルであれ、成員であれ固有名詞の候補となる。

最後にゲシュタルトがラベルにおいても、成員部分においても無い場合を考える。これにはフレームのカテゴリーがある。フレーム的カテゴリーとは、カテゴリーラベルに関連するものがゆ

るやかに結びつくカテゴリーで、フレームも含まれる。固有名詞は、他とはっきり区別される唯一物でなければならない。そのためフレーム的カテゴリーは、固有名詞になることは通例ない。

もう一つ明確なゲシュタルトがないものとして(10)のタイプAがある。しかしタイプAは4.3節で述べたように、特殊で唯一物になったり(11)、個体化したり(12)、theを付加して境界を明確にすることで(13)、固有名詞になることができた。ここでも個別性、ひいてはゲシュタルト性に関わる。

個別性との関わりでもう一つ別の視点が必要である。個別的であるためには、永続的でなければならない。スコラ哲学の立場から普遍的な品詞の定義を試みた「モディスト」たちの名詞の定義を見てみよう。彼らは、名詞を「存在物もしくは一定の特徴をもつものの様式によって意味を表す品詞。存在物の様式とは固定と永続の様式である」と述べている(町田 2005:24)。すなわち名詞らしさには永続的である必要がある。当然ながら固有名詞においてもこれはあてはまる。一時的なカテゴリーは永続して使われない限り、固有名詞になることはない。例えば、明日の時間割の準備をしましょう。これは学年やクラスが異なれば、各々の子どもでも異なるし、そのときだけの一時的な集合体である。これに対して「2012年8月2日聡子時間割」などと命名されることなどは通例ありえない。一時的カテゴリーには、永続性はなく、他と区別する必要がないからである。そのため固有名は永続的カテゴリーに限られる。

5. 繰り返しの固有名詞

固有名詞は本来、特定の個体に付けられるものであり、一つしかないはずである。しかし実際には固有名それ自体が複数存在するものがある。例えばChristmasは毎年ある。Monday, Tuesdayなど曜日にはもっと多い(cf. Lehrer 1992:124)。それではなぜこれらが固有名詞になりえるのかが問題になる。結論から言えば、これらは最小カテゴリーの中で、唯一物と考えられるからである。Christmasなど年に一回あるものは、1年が最小カテゴリーとなり、その中である特定の日に固有名が割り当てられる。Mondayなどの曜日も同じである。1週間という最小カテゴリーの中で、決められた順番にくる特定の日に固有名が割り当てられる。最小カテゴリーは明示されず、含意された状態で成員特定が行われている。

役職名に対しても同様なことがおこる。例えば織田(1994:28)が言うように、the Deanは、いつのDeanかでその指示物が異なってくる。そのためデフォルトでは、現在のDeanであるが、この場合は最小カテゴリーが現体制になっており、その中で成員が特定される。しかしこの最小カテゴリーは明記することで、あるいは文脈において、異なる最小カテゴリーに変更することもできる。その最小カテゴリーにおいて、成員特定ができれば、固有名を与えることができる。このとき最小カテゴリー内で、指示物は一つに特定されることとなる。

一方yesterday, tomorrowはMondayと似ているが、固有名詞にはならない。最小カテゴリーが存在しないからである。悠久の時の流れの中で、今日の前の日をyesterday, 今日の翌日をtomorrowとしているに過ぎない。一ヶ月とか1年というカテゴリーの中での選択ではない。単

なる関係によって、日に名前がつけられている。カテゴリー特定がないため、固有名とはなりえない。単に特定の日であるかどうかではなく、カテゴリー特定と成員特定の2つがあるかどうかがある固有名にとっては重要である。2つの特定があってはじめて固有名、ひいては固有名詞が成立する。

類例として人名を考えてみよう。同じ会社に同じ姓、例えば鈴木さんがいたとしよう。この場合どの鈴木さんか特定する必要が生じたとき、我々はどうするであろうか。最小カテゴリーを付加することを行う。例えば、男性の鈴木さん、庶務課の鈴木さん、年配の鈴木さん、などなどである。すなわちカテゴリー特定を行う。そのため5つ子が生まれたとして、全員に同じ名前をつけることはできない。5つの異なる最小のカテゴリーを考えることが難しいからである。

6. まとめ

以上固有名ひいては固有名詞について考察した。ここでの主張は、固有名は2つの特定（カテゴリー特定と成員特定）及び力点推移（ラベルの必須化）が必須要件であると述べてきた。さらにカテゴリータイプを修正し、それをもとにカテゴリー特定レベルでのカテゴリータイプとの関連を見てきた。本研究は一連の命名研究の一つになる。本研究で扱わなかった成員特定レベルの命名も含んだ形で、さらに研究を進めていきたい。そこでは比喩のプロセス（同一化と焦点推移）が、命名のプロセスに深く関わっていくことを示していく。名詞に関わる事柄には、カテゴリーの概念が深く関わっていると考える。

注

- * 1 固有名詞と固有名は、厳密には同じではない。固有名はMary, Japanなどの単一の名詞とは限らず、様々な形態をとるからである。しかしここでは両者を厳密に区別せず、似た意味で用いていく。
- * 2 この2つの働きは柄谷（1989, 1994）で示してある単独性と特殊性に通じるものがある。柄谷は単独性を、普遍性－単独性の概念においてとらえ、特殊性を、特殊性－一般性の概念においてとらえる。単独性が表現力を、特殊性が表示力を示していると考えられることができる。ただ単独性は「孤立した遊離したものでもない。単独性は、かえって他なる物を根本的に前提し他なる物との関係において見いだされるのである」とする（柄谷 1994：22）。そのため柄谷の単独性と、ここでのカテゴリーの概念は、共通する部分があると考えられる。
- * 3 奥富（2006：59）で「古代では同じ血縁の集団を「氏」といい、その氏の名称が「氏名」だった。つまり「氏名」は血縁集団の名称であって、個人のものではなかった。」と述べている。
- * 4 theseやthoseは複数であるが、これらは集合体の一つのゲシュタルトとして認識されている。
- * 5 むろんtheが付加する固有名詞はあるが、それは4.3節で述べていく。
- * 6 （あの視力検査をするとき目にはめる黒いスプーンみたいなもの）と言葉で説明することもできるが、身振り手振り（例えば手をお椀の形にして目を覆う）でも説明することができる。

きる。いずれにせよ成員である属性を語っている。

- * 7 月浦 (2005 : 45-46) では、「固有対象の固有性が高まるにつれて、重要な脳領域は側頭葉後方から先頭部へと変化する」と述べている。つまり固有性の違いによって、その活性領域が連続的に変化する。本稿の立場を踏まえると、(8) の A ~ D の連続は、脳の活性領域においても、側頭葉後方から先頭部へと連続して対応している可能性がある。これは別の研究成果を待たなければならない。
- * 8 命名されることで初めて世界は分節され、指向対象が存在するというソシユールの言語観に立脚すれば、「命名→存在/認識」の立場になる。命名それ自体が認識という考え方である。しかしこれでは名前を知らなければ認識しないことになってしまう。そのため素朴に「存在/認識→命名」という立場も考えられる (cf. 野村 2005 : 30-31)。本稿の立場で言えば、固有名詞の場合は前者「命名→認識」であるし、普通名詞の場合は後者「認識→命名」になる。固有名詞の場合、命名することで、それが固有物であることが認識される。一方普通名詞は 3 節で見てきたように、ラベル部分は必須部分ではない。まず成員部分(属性を含む)を認識し、その後で命名が随意的におこる。そのため命名と認識どちらが先かという議論は、普通名詞と固有名詞の違いを踏まえて議論をしなければならないことが分かる。
- * 9 これは種を類で表すメトニミーと同じで、任意の各成員をラベルに置き換えて表現している。
- * 10 比喩のプロセスについては緒方 (2011b) で考察した。そこではニックネーム等にも比喩のプロセスが適用されることも示した。固有名の命名には、この比喩のプロセスが大きく関わると考える。
- * 11 緒方 (2011a) と違い、(10) ではカテゴリーラベルの部分が追加されている。
- * 12 別の見方として、元からタイプ E であったと考えることができる。この場合、際だった特性 (成員) がカテゴリーラベルとして使用される。これは種を類で置き換えるメトニミーと同じ比喩のプロセスが関わることになる。比喩のプロセスであるため、成員特定レベルでの命名になる。
- * 13 類例として、the young Shakespear など固有名詞が修飾語句を伴い、個体カテゴリーの成員を表現することもある (cf. 安井・中村 1984 : 251)。

参考文献

- Berry, R. 1993. *Articles*. London: Harper Collins.
- 出口 顯. 1995. 『名前のアルケオロジー』 紀伊國屋書店.
- Hewson, J. 1972. *Article and noun in English*. The Hague: Mouton.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Interpol, United Kingdom. 2006. *A Guide to Names and Naming Practices*. London: UK Government Press.
- 城生佰太郎. 1991. 「命名を考える」『日本語学』10:6, 15-23. 明治書院.
- 柄谷行人. 1989. 『言葉と悲劇』第三文明社.
- . 1994. 『探求Ⅱ』(講談社学術文庫). 講談社.
- Lehrer, Adrienne. 1992. "Names and naming: Why we need fields and frames," *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, ed. by A. Lehrer and E. F. Kittay, 123-142. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 町田 健. 2005. 「名前とは何か」『言語』34 (3), 22-29.
- 蓑川恵理子. 2006. 「商品名の命名メカニズム: 家庭用電気製品「三種の神器」を例に」『日本語の研究』2 (1), 48-63. 日本語学会.
- 森岡健二. 1977. 「命名論」『言語生活 (岩波講座日本語2)』203-248. 岩波書店.
- 野村益寛. 2005. 「命名の認知プロセス」『言語』34 (3), 30-36.
- 織田 稔. 1994. 『直示と記述同定: 英語固有名の研究』東京: 風間書房.
- 緒方隆文. 2011a. 「限定詞とカテゴリータイプ」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第6号, 41-53.
- . 2011b. 「メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ」『年報』第22号, 115-129.
- 奥富敬之. 2006. 「地名と名字と苗字」『言語』35 (8), 58-65.
- 鈴木孝夫. 1996. 『教養としての言語学』(岩波新書) 岩波書店.
- 玉村文郎. 1998. 「命名と造語」『日本語百科大事典』大修館.
- 月浦 崇. 2005. 「名前は脳のどこに格納されるか」『言語』34 (3), 40-47.
- 安井 稔・中村順良. 1984. 『代用表現』研究社.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)